



そんな期待を抱きながら、雨の中、励まし合い、助け合いながら、一歩ずつ登った。

しばらく歩いて、おかしなことに気がついた。下を向いて歩いているにもかかわらず、雨が顔に当たるのだ。

富士山には、山腹に風をさえぎる樹木がないため、雨は上から降るだけでなく、横から、そして、下から吹き上げてくる。

「まさか、こんなことになるうとは…」少し晴れ間が見えたかと思うと、いつの間にか霧の中にいる。

約50人の団体行動、徐々に、先頭と最後尾の距離が広がっていく。当然のように、口数は少なくなっていった。

六合目の休憩所でひと休み、記念撮影をするにも、降り続く雨のためカメラを出すことさえできない状況。インストラクターの指示を待った。

「とりあえず、七合目まで。それ以上は、岩場が続き危険ですので、そこで様子を見ることにします」

途中、何人も下りてくる人たちと遭遇。その都度、聞いてみる。

「こんにちは、何合目まで行かれましたか？」

「七合目です。天気が悪くて、それ以上は無理でした」

同じ会話が繰り返された。そして、出発してから、約2時間、七合目到着。依然として、雨は降り続き、時折、小さな氷が混じるようになった。休憩所には、多くの登山者が待機していた。

●七合目、無念の下山

「なぜ、頂上まで行けないの？」下山という事実を目の前に、参加者たちから不満の声が聞こえる。

「日本に来てからずっと、富士山に行きたかった」

母国を離れ、日本で生活する人たちにとって、日本最高峰の「富士山」に登り、その頂上に立つ。それは、遠い母国を想いながら、自分の現状を再認識するために必要な場所、チェックポイントの一つだったのではないだろうか。

「遠くから見るのが多かった富士山、遠目とは違う富士山を間近に見てみたい」

美しさと厳しさを合わせもつ、日本のシンボル「富士山」——参加者の目には、どのように映ったのだろうか。

登山は、諦めるタイミングが一番難しいという。たとえ頂上が目の前にあったとしても、中止する勇気が必要なのだと。下山途中、皮肉にも晴れ間が続いた。「まだ登れたんじゃないかな？」そして、眼下に広がる雲海を眺めながら、「富士山だけはわからないんだよ」口に出して言ってみた。

●「ピース登山隊」・出発～解散

「日本人の友達ができるかもしれないし、日本に来てまだ面白い経験がなかったので参加しようと思いました。今回、日本で一番高くて有名な富士山に登って、思い出を作りたい。すごく楽しみにしています」

(出発前、参加者からの手紙より)

7月12日、「ピース登山隊」は、午後3時に集合場所の新宿駅西口をバスで出発した。行き先は、静岡県御殿場市にある国立中央青年の家(以下、青年の家)、富士山の麓だ。

参加者は、日本、韓国、アメリカ、フランス、バングラデシュの五カ国55名。

午後5時30分、青年の家に着いてすぐに、結成式が行なわれ、続いて、野外炊事場でバーベキュー。その頃、すでに辺りは薄暗くなっていた。

「一緒に何かをつくる」これは、見知らぬ者同士が仲良くなるために、最も手っ取り早いコミュニケーションの一つかもしれない。

後片付けが終わった頃、辺りは懐中電灯が必要なくらい暗くなっていた。



参加者たちは、小さな照明の下に集まって、それぞれの国のゲームを紹介したり、文化や習慣などの違いについて話している。なかなかその場を離れようしない。笑い声は深夜まで続いた。

翌日、予定していた「富士登山」は、悪天候のため、七合目で無念の下山。

その夜、予定していたキャンプファイアーは、天気が回復しなかったため、青年の家の敷地内にある体育館で、キャンドルサービスに変更された。

しかし、頂上まで行けなかったという事実、その共通した悔しさが、参加者たちの気持ちを一にした。

「地球の平和と世界の人々が友情で結ばれることを祈ります」

日本、韓国、アメリカ、フランス、バングラデシュ、それぞれの国の言葉で語られ、ロウソクが灯される。天井を叩く雨の音だけが聞こえた。

そして、時間を忘れ、疲れた体を忘れて、互いの健闘を称え合うかのように、みんなで歌い、踊った。

いつしか、雨音は聞こえなくなり、体育館には笑い声だけが響き渡っていた。

「同じ感動を味わった人たちが、世界中にいるということは素晴らしいことだと思う」

実行委員長のキム・ヨンファンさんは事前の打ち合わせで、このように言っ



いた。2002年7月13日、国籍も文化も違う多様な人々が、平和への願いを込めながら、日本のシンボル「富士山」の頂上を目指した。

その結果が、たとえ七合目で下山だったとしても、参加者たちにとって、ともに過した時間、世界各地に広がった人と人との「つながり」は、決して風化することはないだろう。

「この3日間は、ずっと忘れることはないと思います。8月になったら、韓国へ戻る私にとって、たぶん日本では最後

